

「よくわかる第2巻」ニュース・最終号

2025. 10. 1 第2巻運営委員会

最後までのご学習お疲れさまでした。交流会では、貴重なご感想・ご意見、ありがとうございます。学習成果が大いに生かされていると感じました。また一緒に学習しましょう。

秋・冬の特別講座をご案内します。これからもよろしくお願いいたします。(運営委員会)

ワンポイント

- ① **アフリカ投資へ新経済圏。日本帝国主義がんばれ！** アメリカ帝国主義の衰退のもと、同じ列強諸国の“領土再分割”。トランプ関税も帝国主義的戦争の経済版。
エンゲルスの忠告の視点:「取引所はブルジョアが労働者を搾取するのではなく、彼ら同士
のあいだで搾取しあう機関だ。」
- ② **減価償却一労働価値説にもとづく、C 運動の仕方の把握がないので、道路整備は国・自治体**
どこも責任ある対応をしない。また運輸を生産と見ず、交通網インフラを重視しない。(かつてのソ連末期の流通網の手薄。)

21 章 蓄積と拡大再生産

◎20世紀 再生産論争

- ① **ナロードニキ vs ツガン・バラノフスキー:資本主義になり市場はあるか？**

レーニンはマルクス再生産論を学び、両面批判。『資本論』の精確な読み取りで社会主義建設へ。

- ② **ローザ・ルクセンブルグ:帝国主義的侵略性の経済的基礎を「再生産論」に求める。**

$IIc = I(v+m)$ が崩れてくる。(ローザの見誤り) → 新市場と資源供給先を求め海外植民地へ。

◎はじめに 最晩年、スミスのドグマを克服し、循環論をしあげたマルクスは、病気と闘い、渾身の力を振り絞って再生産論を書く。マルクスはどんな思いを後世の読者に託したのだろうか？再生産論が示す今日のテーマは？そんな思いを汲み、読み進めたいと思います。(宮川先生)

◎21章の課題 **拡大再生産のための条件** ①貨幣:蓄積のための貨幣積み立てが行なわれている。②素材:諸生産要素が市場にある。すでに拡大再生産が始まっている。①②は、個別資本では想定されていた。社会的総資本の舞台では、まさにここで説明されねばならない。下線の、市場総体で準備されなくてはならない力ネ、モノ、ヒトの追加拡大の諸条件の解明が課題です。

第1節 第部門Ⅰにおける蓄積

1. 蓄蔵貨幣

- ◎ **拡大へ一歩進めるためには、新しい貨幣資本が必要。**自分で作ったmを売り、Ⅰの生産手段に振り向け、買わないA群と、今や、新事業・拡大開始で一方的買いのB群がある。*ⅠとⅡの部門間取引→Ⅰ部門内取引 *A群・B群のアイデアは、第20章、固定資本の補填と同じ。
- ◎流通で見届けなければならないのは、不変資本・可変資本・貨幣s・商品s、固定s・流動s、生

産 s・流通s、といった様々な規定にあるすべての資本の現状復帰を含んでいる。(資本「循環論」の成果) それは、売り・買いの直接的合一ではなく、一方的売り・一方的買いの組み合わせを不可避とする。

◎マルクスの金字塔:自然成長的な資本主義的生産の運動では、再生産の諸条件は、10 年周期の産業循環の法則を形作り、比例均衡ネットワークでは比例は偶然であり、恐慌の可能性として顕わになる。

2. 追加的不変資本

◎単純再生産からの飛躍の第一歩(物質的基礎へのアレンジメント ① ②)

① I m:個人的消費→生産手段。蓄積にまわる生産物はIIの生産手段ではなく、Iの「生産手段の生産物」からなっていないなければならない。

② 追加労働者の生活手段が必要になる。IIの生産物:奢侈品→必需品

価値量是不変の単純再生産の内部で、つくられる使用価値のみが変わる。こうして拡大再生産の物質的基礎がつくられる。(さなぎの秘密)「貨幣→資本(成りあがる)・量から質への転化の運動法則、弁証法として捉えると、第20章から第21章への課題は面白い。」(宮川先生)

(さなぎの秘密:幼虫はひたすら栄養摂取。体のほとんどが腸。さなぎは栄養を取らない。成虫への準備。成虫、蝶もあまり栄養は取らず、生殖機能のみ作用させる。)

3. 追加的可変資本

◎新たに形成される可変資本は想定される。(第1 巻第 7 編 23 章「資本蓄積につれて相対的過剰人口の法則」— 日本では約250万人の失業者)

第2節 部門IIにおける蓄積

◎貨幣積み立ての困難と要素組み合わせの変更の必要性

・こんどは、A 群(I)は、B 群(II)に売ることによってmを貨幣化する、とする。 $\{IIc = I(v+m)\}$

・A群(I)のmの潜在的貨幣資本への転化($w \rightarrow g \downarrow$)は、B群(II)cの商品資本の生産資本への再転化ができない($w \rightarrow g \times$)ことをあらわしている。

◎単純再生産の基礎^上でも、A(I)の蓄積意図ゆえに、Iでの蓄蔵=過剰貨幣資本とIIでの在庫=過剰生産、という攪乱が生じる。(在庫の必要性を持ち出して、攪乱を回避することはできない。前期も後続期も同じ条件におかなければならない。)

・困難は、Iの諸要素の組み合わせの変化だけに起因する独自な現象であることを確認しなければならない。

第3節 蓄積の表式叙述 “拡大”への移行“ ・上記参照

・第一例、第二例以下、宮川先生の資料、『第2・3 巻講義要綱』をご覧ください。

新版『資本論』の、マルクスの方法「背理法」・エンゲルス編集の評価:「問題解決の方向や方法論がつかめないまま…エンゲルスはその特質をつかめないまま…(マルクスは)失敗を繰り返す…」793頁(注57)—「『背理法』は、逃げ道をふさぎ、解決の糸口を絞る論述法。第1巻『貨幣の資本への転化』でも使用された。これを『失敗』と見る研究評価は、他にはない。」(宮川先生)